

イラク支援 空自部隊を首相激励

航空自衛隊員の激励のため、アリ・アル・サーレム空軍基地を訪れた安倍首相(1日午前、クウェート市郊外)。代表撮影



中東の安定に貢献 国内外にアピール

【クウェート】松永安朗
安倍首相は1日午前(日本時間1日午後)、クウェートのアリ・アル・サーレム空軍基地を訪れ、同基地を拠点にイラク復興支援活動を続ける航空自衛隊の部隊を視察、激励した。2004年3月の活動開始以来、首相が同部隊を視察したのは初めて。4月29日にアラブ首長国連邦で行った海上自衛隊のインド洋派遣部隊に続く視察には、自衛隊の積極活用により、中東地域など世界の安定に日本が貢献することを内外にアピールする狙いがある。

「国連の米軍はもとより、イラク国民からも多くの感謝の言葉をもらっている。」

前に、首相は力を入れて訓示した。

今回の中東訪問で、首相は空自部隊視察に強くこだわった。周田は過密スケジュールを懸念したが、首相は「構わない、行こう」と押し切った。

空自の活動根拠となるイラク復興支援特別措置法は7月末で期限切れとなるため、政府は活動を2年間延長する改正案を今国会で成立させる方針だ。「最高指揮官として隊員をねぎらい、部隊の視察を通じて支援活動継続の重要性を国民に訴える」(周田)ことが国内的に大きな意味を持つ。

日本のエネルギー供給の基盤である中東地域の安定に、資金面だけでなく人的にも積極貢献し、同地域での発言力強化につなげたいとの思惑もあるようだ。

実際、首相は中東各国首脳との会談で、自衛隊派遣を含むイラク復興支援策を念入りに説明。共同声明には、日本の貢献に対する評価や謝意が盛り込まれた。